

# 篠 向 城

久世デジタル放送中継局建設事業に伴う発掘調査

2008年3月

久世デジタル中継局建設事業  
埋蔵文化財調査委員会

# 篠 向 城

久世デジタル放送中継局建設事業に伴う発掘調査

2008年3月

久世デジタル中継局建設事業  
埋 藏 文 化 財 調 査 委 員 会

## あいさつ

21世紀に入り急速に進む情報化社会は、私たちの生活のあらゆる局面に変化をもたらします。その一つとして、わが国のテレビ放送開始期より続いた地上アナログテレビジョン放送は平成23年に終わりを告げ、地上デジタルテレビジョン放送に全面移行される予定です。これに向け、全国各地でデジタル放送中継局の設置が進められており、真庭市内においても、久世地域の篠向山に中継局を新たに建設することとなりました。

建設地は美作西部有数の中世山城である篠向城の二ノ丸内に位置するため、その保存保護について協議を重ねてまいりましたが、現状での保存が困難なためやむを得ず工事によって影響を受ける範囲について記録保存を行うこととなりました。そこで真庭市教育委員会と中継局建設に関わる放送事業者が共同で当調査委員会を設立し、発掘調査にあたることとなりました。

1ヶ月半にわたり実施された発掘調査の結果、二ノ丸に築かれた建物跡、土壘などを検出するとともに、備前焼や瓦など多くの遺物を発見することができました。これらの貴重な成果により、これまで窺い知ることができなかった二ノ丸の構造の一端を明らかにすることができました。こうした調査成果を収めた本書が、当地域の歴史の解明や埋蔵文化財に対する理解と关心を高めるうえで、広く活用されることを願う次第であります。

最後になりましたが、調査および本書の作成に際しましては、関係者ならびに地元の皆様から多大なご支援とご協力を賜りました。記して厚くお礼申し上げる次第であります。

平成20年3月

久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会

委員長 植木 真一

## 例　　言

- 1 本書は、岡山県真庭市三崎字弁才天 235 番 3 に位置する篠向城（岡山県遺跡番号・旧久世町 294）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、放送事業者（日本放送協会および民間放送会社 6 社）による久世デジタル放送中継局建設に先立つ事前調査で、発掘調査から報告書刊行に至る経費は放送事業者で支弁した。
- 3 発掘調査は、真庭市教育委員会と放送事業者の協議に基づき、久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会を調査主体とした。
- 4 発掘調査は、委員新谷俊典が担当し、委員池上博が補佐した。
- 5 発掘調査の期間と面積は以下のとおりである。  
調査期間 平成 19 年 6 月 13 日～7 月 30 日 調査面積 100 m<sup>2</sup>
- 6 本書の執筆および編集は、新谷がおこなった。
- 7 出土遺物のうち瓦の自然科学的分析を、白石 純氏（岡山理科大学自然科学研究所）に依頼し、有益なご教示を得るとともに玉稿を賜った。衷心よりお礼申し上げる。
- 8 発掘調査および整理作業の過程において、森 俊弘氏（真庭市教育委員会）にご助言を頂くとともに、篠向城城下町に関する考察を賜った。記して感謝の意を表す。
- 9 本調査に関わるすべての遺物・記録資料類は、真庭市教育委員会（岡山県真庭市落合垂水 1901-5）に保管されている。また、これらの活用、ならびに本調査において作成された資料の著作権の管理は真庭市教育委員会があたる。
- 10 調査ならびに本書の作成にあたっては下記の諸氏、諸機関から多人なご協力、ご指導をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。（敬称略、五十音順）

石井 啓　切明友子　白石 純　西田和浩　乗岡 実　森上知洋　行田裕美

津山弥生の里文化財センター（株）フジテクノ

## 凡　例

- 1 本書で使用した北方位は、平面直角座標第V系の座標北である。また、調査区の座標系の設定及び抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。
- 2 本書の水準高は、東京湾平均海面(T.P.)を使用した。また、第4・5図に示した高さは、調査に伴い設置した基準高( $L = 394.819m$ )からの比高である。
- 3 本書に掲載した遺構および遺物実測図については、基本的に下記の縮尺である。その他の縮尺を用いた場合は別に記している。

遺構実測図 堀建柱建物 : 1/80 土壙 : 1/40 土星 : 1/80

遺物実測図 瓦 : 1/4 土器 : 1/2・1/3 鉄器 : 1/3

- 4 遺構番号については、全体にわたり遺構の種類ごとに通し番号を付している。
- 5 遺物番号については、全体にわたり通し番号を付している。
- 6 遺構の堆積土層・遺物の色調は、『新版標準土色帖(1988年度版)』に従った。
- 7 本書の第2図に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図の「勝山」「久世」を複製加筆したものである。また、第3図に掲載した縄張図は、難波澄夫氏(真庭市文化財保護審議会委員)が作成し、真庭市教育委員会が保管する図面を複製加筆したものである。

# 目 次

## あいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査および報告書作成の経過 .....	1
第3節 調査および報告書作成の体制 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 .....	4
第3章 調査の概要 .....	7
第1節 調査区の位置と概要 .....	7
第2節 遺構 .....	9
第3節 遺物 .....	13
第4章 まとめ .....	16

## 附編

1 篠向城下における「町」の形成と推移をたどる ..... 森 俊弘 .....	17	
—主に近世・近代の文献史料を手掛かりに—		
2 篠向城跡出土瓦の胎土分析 .....	白石 純 .....	20

図版

報告書抄録

奥付

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	4
第2図 周辺の主要遺跡 (1/25,000)	5
第3図 篠向城縄張と調査地点 (1/5,000)	7
第4図 調査区位置及び周辺地形測量 (1/350)	8
第5図 遺構配置及び土層断面 (1/100)	9
第6図 挖建柱建物 1～3 (1/80)	10
第7図 土壌 1～5 (1/40)	11
第8図 土星 1 (1/80)	12
第9図 土留内土留 (1/40)	13
第10図 出土遺物 1 (1/4)	14
第11図 出土遺物 2 (1/2, 1/3)	15

## 表目次

表1 文化財保護法に基づく提出書類等一覧	3
表2 遺物観察表	16

## 図版目次

図版1	
1 篠向城遠景 (南から)	
2 調査前全景 (南西から)	
図版2	
1 調査区全景 (南から)	
2 調査区全景 (南西から)	
図版3	
1 調査区土層断面 (南から)	
2 挖建柱建物 1 (北東から)	
3 土壌 1 (北から)	
4 土壌 2 (東から)	
5 二丸北西部土星 (東から)	
図版4	
1 土星 1 (南西から)	
2 土星 1 断面 (南東から)	
3 土星内土留 (南西から)	
図版5	
1 土星内土留 (東から)	
2 土留内瓦出土状況 (北東から)	
3 調査風景	
図版6	
1 出土瓦・土器	
図版7	
1 出土陶磁器・鉄器	

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

近年の情報化社会の進展に対応するため、約60年間続いたテレビのアナログ放送は2011年に終了し、地上デジタル放送に全面移行される予定である。これに向け、現在各地においてデジタル放送中継局の整備が進められている。市内においても、久世地域を主たる放送エリアとする中継局を新たに建設する計画が生じ、現在アナログ放送中継局等が林立する笛向山が建設地として選定された。

笛向山には周知の遺跡である笛向城が所在しており、岡山放送株式会社から真庭市教育委員会に平成19年4月、その取扱いについて照会がなされた。建設地は二ノ丸内に位置し、地表面を観察すると土壌が良好な状態で遺存していることが明瞭であった。これらの遺構の保護対策について協議がなされたが、中継局の立地条件からみて他所への設置が困難であること、事業の公益性が著しく高いことなどの要因から、事前調査を実施し記録保存の措置を講ずることとなった。

岡山放送株式会社と真庭市教育委員会による事前調査の実施方法等に関する協議の結果、真庭市教育委員会と中継局建設に関わる放送事業者（日本放送協会岡山放送局、山陽放送株式会社、岡山放送株式会社、テレビせとうち株式会社、西日本放送株式会社、株式会社瀬戸内海放送）の代表者からなる「久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会」を設立し、同委員会が調査主体となり事前調査を実施することに決定した。そこで、平成19年5月24日に調査委員会を設立し、平成19年6月1日に同委員会と放送事業者間で調査に係る協定を締結した。

## 第2節 調査および報告書作成の経過

調査は、建設事業により遺跡が消滅する範囲の状況について確認し、記録保存することを目的に実施した。調査期間は平成19年6月13日から7月30日であり、調査面積は100m<sup>2</sup>である。調査は表土除去、掘下げ、遺構の精査等すべて人力で実施し、必要に応じて遺構の実測図作成、写真撮影等を行った。なお、発掘調査時における高さはすべて仮0点を基準に測量・記録を行い、調査終了後に水準高を求める方法を探った。そのため、報告書中においても地形測量に基づく等高線の高さについては、仮0点からの比高をそのまま表記するかたちとなっている。

報告書作成は、平成19年12月から平成20年2月まで実施した。調査終了後、出土遺物の洗浄、註記、復元作業はすみやかに行っており、12月から出土遺物の実測・拓本・写真撮影、報告書図面の作成・清書を順次実施した。

### 日誌抄

6月13日	機材搬入、環境整備	7月6日	調査区完掘、全体写真撮影
6月15日	表土除去、掘削開始	7月9日	全体図等作成作業
6月28日	土層観察用のベルト除去	7月30日	調査終了、機材搬出

### 第3節 調査および報告書作成の体制

本調査は、真庭市教育委員会および放送事業者関係者により構成される、久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会が事業主体者となり実施した。

久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会

役職名	氏名	所属
委員長	植木 真一	真庭市教育委員会教育次長
副委員長	三船 光夫	真庭市教育委員会教育総務課長
委員	太田 克彦	日本放送協会岡山放送局副部長
委員	村木 邦久	岡山放送株式会社技術局次長
委員	杉 和彦	岡山放送株式会社技術局送信部課長
委員 (事務担当)	池上 博	真庭市教育委員会教育総務課参事
委員 (調査担当)	新谷 俊典	真庭市教育委員会教育総務課上級主事

発掘調査作業員

池田 功 為本 和男  
奥田 章 二宗 久夫  
小田 武 村松 正治  
黒瀬 暉



調査参加者

久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会会則

(設置)

第1条 真庭市三崎字弁才天235番地3内の久世デジタル中継局建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施するため、「久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会」(以下「委員会」という。)を設置する。

(目的)

第2条 委員会は、久世デジタル中継局建設事業に伴う敷地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、保存の措置等を行うことを目的とする。

## (事業)

第3条 委員会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

(1) 久世デジタル中継局建設敷地地内の埋蔵文化財の発掘調査及び保存に関すること。

(2) その他、この目的を達成するために必要な事業。

2 前項の事業に必要な経費は、放送事業者が負担する。

## (組織)

第4条 委員会は、真庭市教育委員会及び放送事業者をもって構成する。

2 委員長は真庭市教育委員会教育次長、副委員長は真庭市教育総務課長をもって充てるものとし、委員は関係機関の内から委員長が委嘱する。

3 委員長は委員会を代表し会務を総理する。副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故ある時はその職務を代行する。

4 委員会に、発掘調査を専門的に実施する調査員及び事務職員を置く。調査員及び事務職員は委員長が委嘱する。

## (任期)

第5条 委員長及び委員の任期は、第2条に定める目的が達成されるまでとする。

## (会議)

第6条 委員会は、委員長が招集する。

2 委員会は、次の事項について審議する。

(1) 会則の制定及び改廃に関する事。

(2) 調査の基本方針に関する事。

(3) その他、必要な事項。

## (補則)

第7条 この会則に定めるもののほか、委員会の運営に関して必要な事項は、委員会が別に定める。

## 附則

この会則は、平成19年5月24日から適用する。

表1 文化財保護法に基づく提出書類等一覧

	日付	提出書類	届出者
1	H19.4.23	埋蔵文化財発掘届出 (法93条第1項)	岡山放送株式会社技術局長
2	H19.5.10	埋蔵文化財発掘調査の届出 (法92条第1項)	久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会委員長
3	H19.8.7	埋蔵文化財発見届	同 上
4	H19.8.7	埋蔵文化財保管証	同 上
5	H19.8.31	篠向城跡発掘調査概要報告	同 上

\*提出先はすべて岡山県教育委員会

## 第2章 遺跡の位置と環境

篠向城は、岡山県真庭市三崎・大庭・平松・古見にまたがる標高約419mの笠向山に築かれた中世の山城である。篠吹城、篠葺城などと記されることもある。

城跡の所在する真庭市は、平成17年3月に旧真庭郡を中心とする9町村の合併により誕生した、828km<sup>2</sup>と県下最大の面積を誇る自治体である。市の南西部にあたる久世・落合地域は、美作の東西交通の動脈である出雲街道と備中に通じる往来、旭川を利用した水運の結節点にあたり、古来より交通の要衝、物資の集積地として発展してきた地域である。標高約483mの若林山を最高所として東西に連なる山塊の最西端に位置する笠向山は、この両地域の境をなす。山頂からは、中国山地と吉備高原との境界域にあたる両地域の小盆地を眼下に一望することができる。この小盆地には旭川とその支流である目木川により形成された谷底平野が広がるが、平野に所在する遺跡は少なく、むしろ周辺の低丘陵や旭川の支流に沿った谷部において多くの遺跡が確認されている。

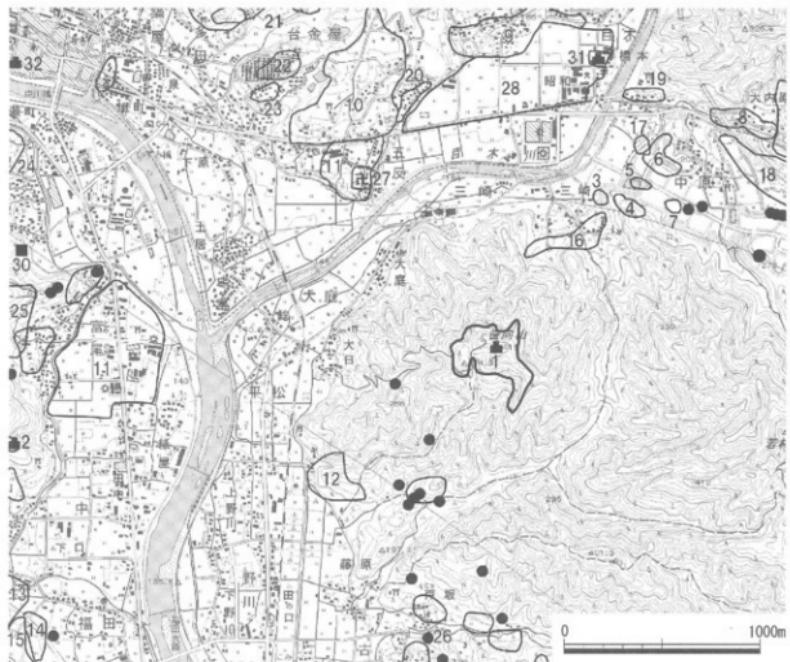
笠向山周辺の遺跡のうち、最も時代が遡る遺跡は縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した高屋B遺跡<sup>①</sup>であるが、弥生時代中期中葉以前の遺構が検出された事例は少ない。該期の遺跡としては、縄文時代後期から晩期に属する65基の落とし穴状土壙が検出された且山遺跡<sup>②</sup>、弥生時代中期中葉の竪穴住居が確認された福田A遺跡<sup>③</sup>がある。弥生時代中期後葉から後期に到り遺跡数は著しく増加し、高屋B・福田A遺跡、真庭産業団地建設に伴って調査された惣台遺跡<sup>④</sup>・且山遺跡・先且山遺跡<sup>⑤</sup>の諸遺跡、樋ヶ鼻遺跡<sup>⑥</sup>などにおいて集落跡が現在までに発掘調査されている。惣台遺跡、先且山遺跡では古墳時代にも集落が営まれ、住居址や掘建柱建物などの遺構が検出されている。これらの集落跡は小規模なものと想定されるが、三崎・台金屋地区に所在する大旦遺跡<sup>⑦</sup>や五反遺跡は立地環境に恵まれ、当地域の拠点的集落として機能していた可能性がある。

古墳時代には丘陵上や旭川の支流に沿った谷地に多数の古墳が築かれている。金屋1号墳のように中期に属する古墳もあるが、多くの古墳は横穴式石室を主体とする後期古墳であり、金屋古墳群・多田古墳群・丸山古墳群など小地域ごとに古墳群が形成されている。笠向山山麓付近では、北麓周辺において惣台遺跡・且山遺跡といった集落跡を隈む丘陵に中原古墳群<sup>⑧</sup>・三崎古墳群などの古墳群が築かれている。一方、西麓や南麓では古墳の造営活動は低調であり、古見地区に所在する前期の前方後円墳である天王塚古墳を除けば小規模な古墳がいくつか存在するにとどまる。

古代には、三崎の丘陵先端部に五反庵寺<sup>⑨</sup>が造営される。北東に1km離れた場所には大庭郡衙推定地に比定される西口遺跡が所在し、この地域が古代大郡の



第1図 遺跡位置図

第2図 周辺の主要遺跡 ( $S=1/25,000$ )

政治的中心地であったことがうかがえる。一方、真島郡衙推定地としては高屋地区が古くから挙げられており、奈良時代の掘立柱建物が検出された高屋遺跡周辺に比定されていた。しかし、平成9（1999）年に落合町が実施した真庭市鹿田に所在する郡遺跡<sup>⑩</sup>の発掘調査により、現時点では同遺跡を真島郡衙とする見解が有力となっている<sup>⑪</sup>。

中世になると、古代の郷名を引き継ぐたちで、篠向城周辺は大庭郡久世保、美和保、河内莊、田原莊、大庭保、真島郡真島莊、垂水郷などにより構成されている。久世保は大炊寮領、河内莊は賀茂別雷社領、田原莊は壬生官務家領、真島莊は長講堂領（のちに右大弁宰相家の支配地）とされている<sup>⑫</sup>。中世の前半は、史料に乏しく詳細について明らかではない部分が多い。

## 第2章 遺跡の位置と環境

戦国期の久世・落合地城及び篠向城を巡る動向については、森俊弘の一連の論考に詳しく述べられており<sup>⑩</sup>、その成果に基づいて篠向城の築城から廃城に至るまでの経緯について簡単に記しておく。

篠向城の築城は、元禄4(1691)年に成立した「作陽誌」の記載に基づけば建武年間以前に遡るとされる。14世紀中頃から15世紀後半にかけては、山名・赤松両氏による争奪が繰り返されていたようであり、「太平記」、「藤原涼軒目録」に篠向城を巡る攻防に関する記述がみられる。

16世紀初頭には真庭市勝山の高田城を拠点とする国人領主三浦氏の支配下となったと考えられ、文亀年間(1501～1504年)に三浦氏が城主山名右近亮を討ち取り、被官の福田・金田氏等を在番として置いたと「作陽誌」に記されている。その後、尼子・浦上・三村・毛利・宇喜多ら諸氏が美作国に侵入する動乱の時期を迎え、天正3(1575)年、三浦氏は高田城から放逐されることになる。この時期の篠向城に関する史料は少ないが、永禄12(1569)年には牧氏ら牢人衆が篠向城を拠点に高田城回復のため毛利氏と交戦した記載が「下岩牧家文書」などにみられる。また、本丸採集の軒瓦には天正5(1577)年の陰刻がされている<sup>⑪</sup>。このように、城郭が継続的に利用されていたかは不明であるが、美作西部における防衛拠点の1つとして篠向城は諸氏による度重なる利用があった。

天正7(1579)年、宇喜多直家が織田信長に服属したを契機に、美作国内でも宇喜多氏と毛利氏の間で争乱が繰り広げられる。この年、直家は沼本新右衛門に命じ篠向城の普請を行わせている。天正9(1581)年には毛利方により落城の憂き目をみるが、翌10(1582)年を経て再び宇喜多氏の領有として回復する。

まもなくして、篠向城は宇喜多氏の一門である江原親次の居城となる。該期の史料である「中島本政覚書」には、篠向城に「本丸」、「二ノ丸」の名称が用いられていること、また天正20(1592)年に親次は宇喜多秀家に従い朝鮮に出兵していることなどが記されている。「作陽誌」では、親次の最期は慶長3(1598)年に朝鮮で病死したとされている。親次死後の篠向城に関する記載は途絶え、廃城の時期は明らかでない。

### 【註】

- (1) 松本和男「高麗B遺跡」『落合町埋蔵文化財発掘調査報告』1 落合町教育委員会 1983年
- (2) 浅倉秀昭「且山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136 岡山県教育委員会 1999年
- (3) 切明(森田)友子「福田A遺跡」『落合町埋蔵文化財発掘調査報告』1 落合町教育委員会 1983年
- (4) 福田正継ほか「懸台遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136 岡山県教育委員会 1999年
- (5) 福田正継「先丘山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136 岡山県教育委員会 1999年
- (6) 米田克彦ほか「種ヶ鼻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 岡山県教育委員会 2004年
- (7) 松本和男「大旦遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』57 岡山県教育委員会 1984年
- (8) 福田正継ほか「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93 岡山県教育委員会 1996年
- (9) 池上博「五反庵寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』2 久世町教育委員会 1997年
- (10) 切明女子「郡遺跡」『落合町埋蔵文化財発掘調査報告』4 落合町教育委員会 2004年
- (11) 註(10)と同じ
- (12) 三好基之「美作國」『講座日本圧縮史』9 吉川弘文館 1999年  
「角川日本地名大辞典」編纂委員会・竹内理三編「33岡山県」『角川日本地名大辞典』角川書店 1989年
- (13) 森 俊弘「美作西部における戦国期の経緯について」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』3 久世町教育委員会 1999年  
森 俊弘「編年資料」『久世町史 資料編』1 久世町教育委員会 2004年  
森 俊弘「篠向城一関連資料の再検討」『篠向城跡』NTTドコモ中國受信施設建設埋蔵文化財調査委員会 2007年
- (14) 乗岡 実「中世山代の瓦二題—山城の近代化と天正の瓦師たち—」『言備されど吉備』古代吉備国を語る会 2000年

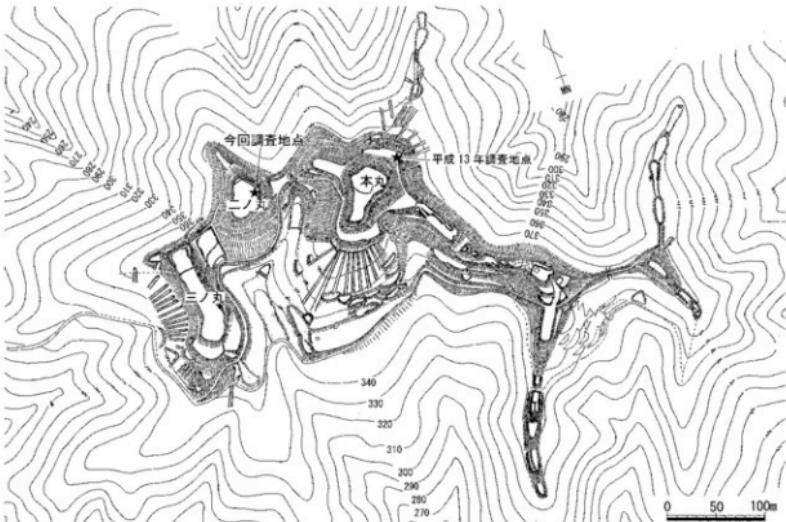
## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査区の位置と概要

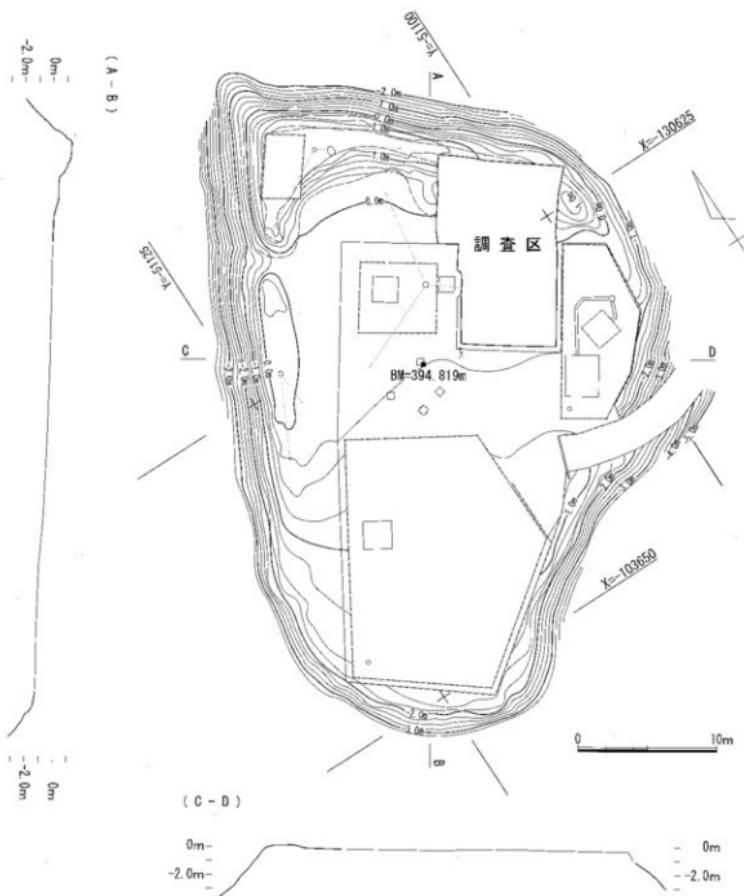
篠向城は、東西約550m、南北約520mの城域を有する。笠向山最高所に位置する本丸と、西側の尾根筋に所在する二ノ丸、三ノ丸のほか、それらを取り囲む多数の中大小の曲輪が築かれている。一方、南東に延びる尾根筋にも曲輪が存在し、そこからさらに南北に向けた尾根筋上に小規模な曲輪が派生している（第3図）。

調査区が含まれる二ノ丸は、現状で長軸（北東—南西方向）に約40m、短軸（北西—南東方向）に約26mの広がりをもつ（第4図）。本丸平坦面との比高では約26m低く、本丸と二ノ丸を結ぶ東側の谷筋に築かれた小規模な曲輪に比べ約4m高い位置にある。平面形は南北を長軸とする台形状を呈し、曲輪の平坦面は南側に緩やかに下降している。ただし、既存のテレビ中継局建設時に曲輪のかなりの部分が破壊を受けていると考えられる。そのため、本来の規模や防衛施設の存在については不明な点が多く、現状で判明している防衛施設は土塁のみである。土塁は曲輪北辺において明瞭に観察でき、西辺においても北辺に比べやや不明瞭だがその存在を視認できる。しかし、東辺では建設工事に伴い破壊されており、曲輪南半においては痕跡さえ見出せない状況である。二ノ丸と隣接する曲輪を結ぶ通路は明確でなく、また二ノ丸の斜面では堅掘は確認されていない。

調査区は二ノ丸北東部に位置し、調査対象面積は100m<sup>2</sup>である（第5図）。ただし、中継局をはじ



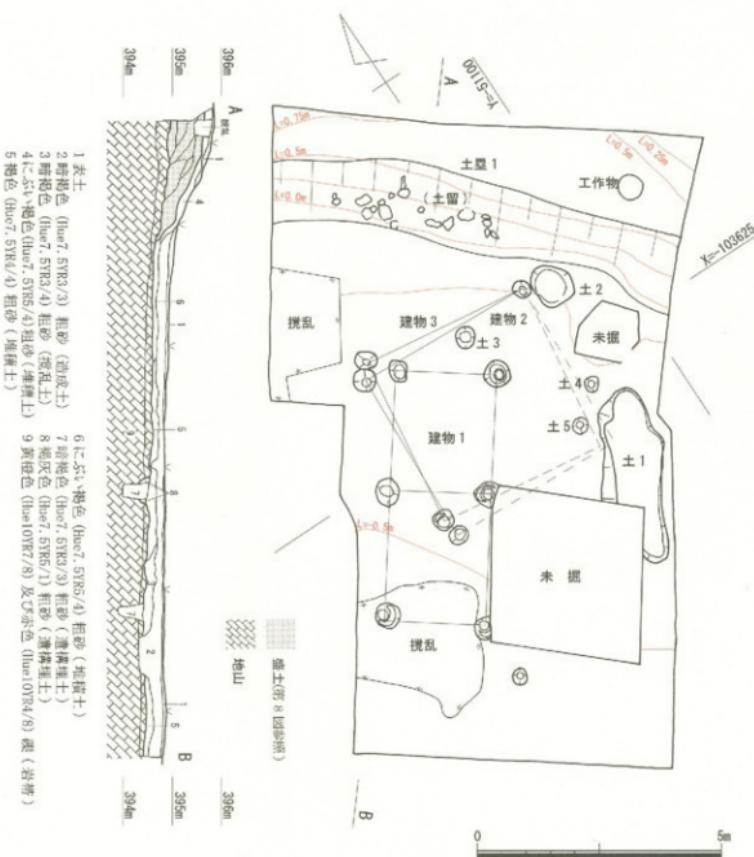
第3図 篠向城縄張と調査地点 (S=1/5,000) (難波澄夫作成図に加筆)



第4図 調査区位置および二丸地形図 ( $S=1/350$ )  
(等高線はL = 394.819mを基準高とした比高)

めとする工作物や工事時の掘削による搅乱箇所が存在するため、実際の調査面積はさらに少ない。調査は遺構検出のうえ、二ノ丸や土壘の構造などの把握を主たる目的に実施した。

二ノ丸の構造をするため、ベルトを設定し土屑の検討をおこなった。曲輪は基本的に岩帶を削平して築造されており、その上位に堆積土および工事時の造成土が堆積する。北辺の土壘は岩帶上に盛土をして築かれており、調査区北東の壁面では土壘築造のため北斜面の埋立てを行っていることが確認されている。このことから、現在の曲輪平坦面と土壘の造成は一体的に行われたと判断できる。



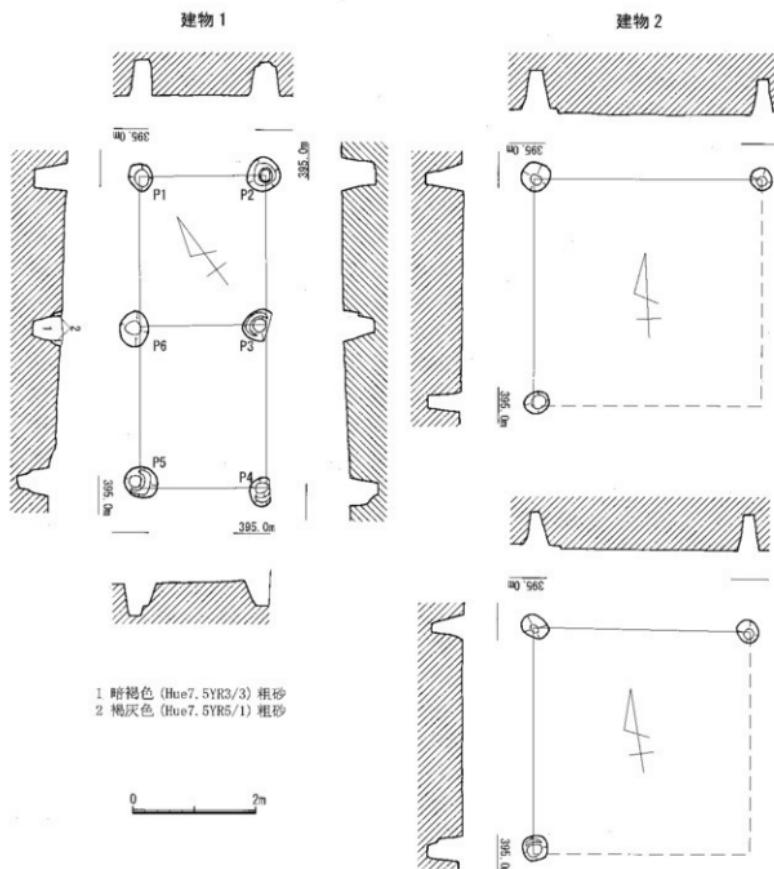
第5図 遺構全体・断面図 (S=1/100)  
(等高線はL = 394.819mを基準高とした比高)

## 第2節 遺構

### 1 掘建柱建物

#### 掘建柱建物1(第6図, 図版3)

調査区の中央で検出し、P3・4の柱穴は一部未掘部分を残す。棟方向は北東—南西、真北に対して東偏35.5°であり、土壙の方向と直行する。現状では南北方向に棟を有する2間×1間(510cm×205cm)の建物跡であるが、調査区外に統く可能性を残す。柱穴掘り方の平面形はほぼ円形を呈し、直

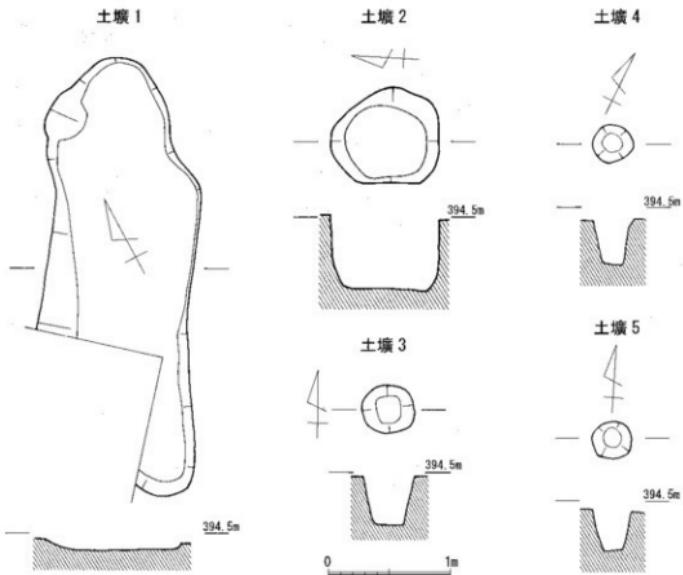


第6図 挖立柱建物 1～3 (S=1/80)

径 48cm～60cm を測る。検出面からの深さは 45cm～55cm である。遺物は、P1～P4 の柱穴内から土師質土器・備前焼、鉄片が出土しているが、いずれも小片のため図示できない。備前焼捕鉢の口縁部片には外面に浅く数条の凹線が施されており、16世紀代に属する。

#### 掘建柱建物 2・3(第6図)

調査区中央北寄りで 2箇所にわたり隣接する柱穴を検出した。整理作業の過程で、これを中心にはほぼ同位置で建替られた 2棟の掘立柱建物を抽出した。南東隅にあたる箇所では柱穴を確認できず、かつ北東の柱穴を共有するため、建物としての認定にやや疑問を残すが、3基の柱穴の規模・深さ・土層は類似する。掘建柱建物 2 が 1間×1間 (376cm × 376cm)、掘建柱建物 3 が 1間×1間 (370cm ×



第7図 土壌1～5 (S=1/40)

376cm)であるが、調査区外にさらに拡がる可能性がある。掘建柱建物2の柱穴は直径36cm～48cm、検出面からの深さは53cm～61cm、掘建柱建物3の柱穴は直径36cm～44cm、検出面からの深さは50cm～53cmを測る。遺物は、いずれの建物から出土していない。

掘建柱建物1～3の新旧関係については、調査で明らかにすることことができなかった。ただし、掘建柱建物1と掘建柱建物2・3は重複する位置関係にあるため、異なる時期の建物として把握できる。後述する土壌1との位置関係を重視するなら、掘建柱建物1が掘建柱建物2・3に後出するものと思われる。

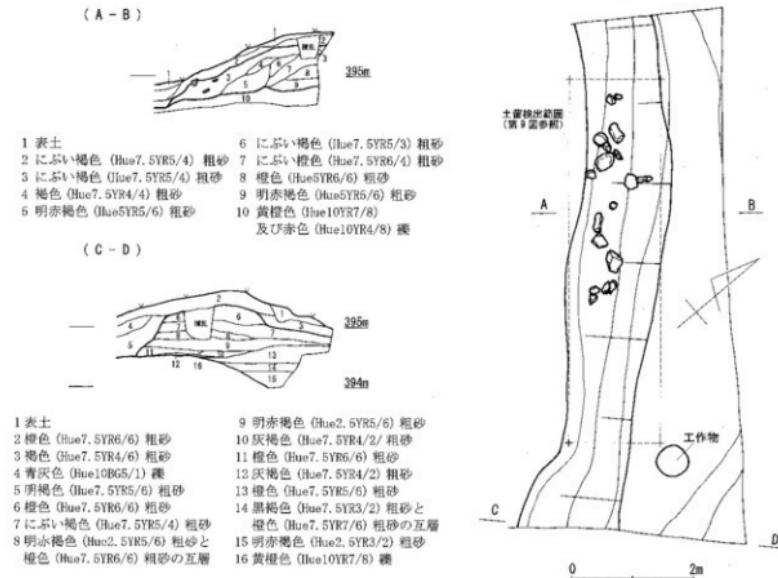
## 2 土壌

### 土壌1(第7図、図版3)

調査区東部で検出された浅い土壌で、南西隅は破綻されている。平面形は長楕円形を呈し、360cm×125cm、深さ20cmを測る。埋土は単層でにぶい褐色を呈する。遺物は、土師質土器皿・擂鉢、備前焼壺、青磁(第11図10)など比較的多くの遺物が出土しているが、いずれも小片である。備前焼壺は、櫛描沈線が巡る壺肩部や口縁部の形態から、15世紀代に位置づけることができる。

### 土壌2(第7図、図版3)

調査区北部で土壌1に接して検出された土壌である。平面形は不整円形を呈し、88cm×78cm、深さ60cmを測る。底部はほぼ平坦である。遺物は、備前焼、土師質土器の小片が少量出土している。



第8図 土壌1 (S=1/80)

## 土壤3～5(第7図)

土壤3は、調査区中央やや北よりで検出された。平面形は円形を呈し、43cm×40cm、深さ40cmを測る。遺物は、土師質土器の小片が出土した。土壤4は、調査区東部で検出された。平面形は円形を呈し、33cm×30cm、深さ38cmを測る。遺物は出土していない。土壤5は、調査区東部で検出された。平面形は円形を呈し、径30cm、深さ34cmを測る。遺物は、備前焼の小片が出土している。これらの土壤は、規模・形態から柱穴の可能性も考えられる。

## 3 土壌

## 土壌1(第8・9図、図版4・5)

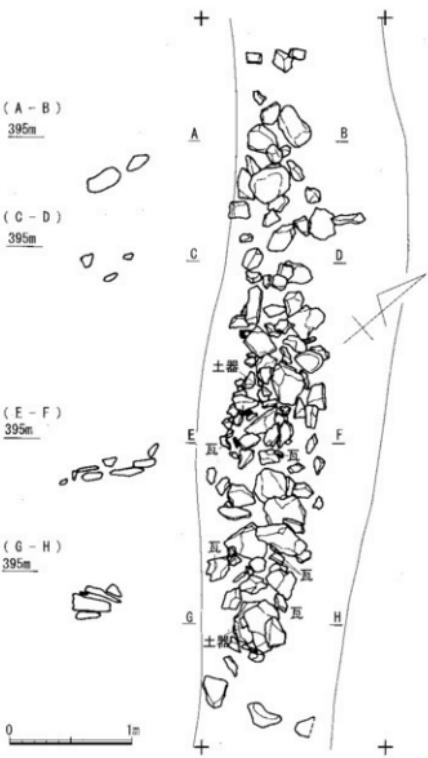
調査区北端に、北西—南東方向に土壌が存在する。土壌の幅は調査区内で350cmを超える。調査区外を併せると約4mはあろうかと思われる。調査区中央のベルト断面(A-B)では、曲輪平坦面より30cmほど高い位置まで岩帶を削平した後、盛土を行っている。5層は6・7層を削平したうえで盛られており、その上に3・4層が被覆されている。土壌の高さは105cm、内側の斜度は30°と比較的緩やかである。調査区東壁断面(C-D)では、曲輪を拡張するため北側に傾斜する岩帶を埋めた(12～15層)のち、盛土(6～11層)を施す。現況で高さ86cmを測るが、盛土の流出、削平が著しい。内側の斜度は53°とやや急である。

杭や柱穴などの遺構は確認できなかったが、土壌の内側斜面で幅約5.6mにわたり土留とおもわれる

礫の集中を検出した。南北幅は0.4m～1m、高さは0.2m～0.4mを測る。石材は笠向山の基盤層である片岩を主体とし、20cm～35cmの河原石も含まれる。一部の礫は表面に露出するが、石垣や貼石と異なり礫の配置に規則性はなく、大半の礫は盛土(A-B断面3層)中に含まれている。この南西側に棟方向が土壁と直交する掘建柱建物1が存在することから、建物側への土砂の流入防止を目的にこの箇所のみ土留が築かれたものと考えられる。

土壘1の築造は、岩帶の削平および北斜面への盛土など曲輪平坦面の整備と一体的に行われている。ただし、土留を伴う3～5層の盛土は、検出状況から築造以降に土壘を修築するために盛られた可能性が高い。また、岩帶である10層は5層下部から漸次高さを減じつつ曲輪平坦面に統一している。土壘内側下端部において中央ベルト断面(A-B)と調査区東壁断面(C-D)との平坦面の高さが同レベルになることから、土壘の修築と合わせ平坦面の一部が再整備されたことも想定できる。

遺物は、土留の礫の間隙から丸瓦(第10図1)、平瓦、備前焼が出土し、盛土中から甕底部(第11図7)などの備前焼が出土している。丸瓦の特徴から、土壘の修築は16世紀後半に時期をもとめることができる。

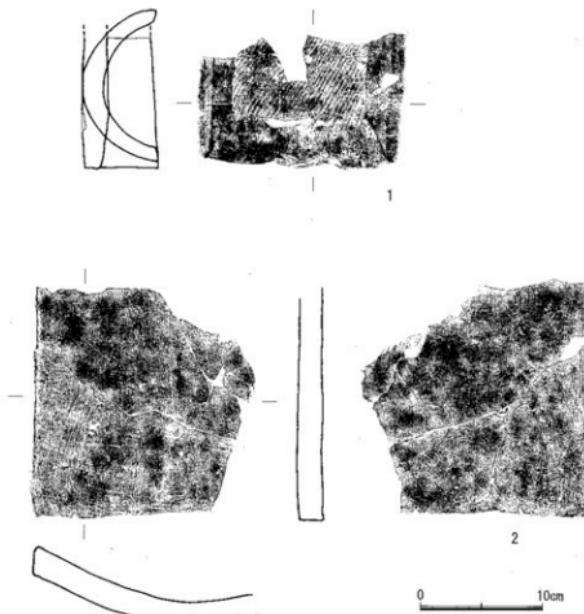


第9図 土壘内土留 (S=1/40)

### 第3節 遺物

今回の調査では、瓦類、土器・陶磁器、鉄器が出土した。出土量はテンバコ約2箱である。掲載した遺物のうち、遺構出土資料は1・7(土壘1)および10(土壘1)である。11は表面採集資料であり、ほかはすべて包含層出土資料である。

瓦は、丸瓦・平瓦が少量出土した。1は丸瓦である。接合した破片の一部は、土壘の土留から出土している。器面は内外面とも灰色を呈すが、断面を見ると内側は赤橙色であり、固く焼けている。内面には、糸もしくは鉄線を用いて粘土塊から一枚づつ粘土板を切り取った際の痕跡とされる斜め方向



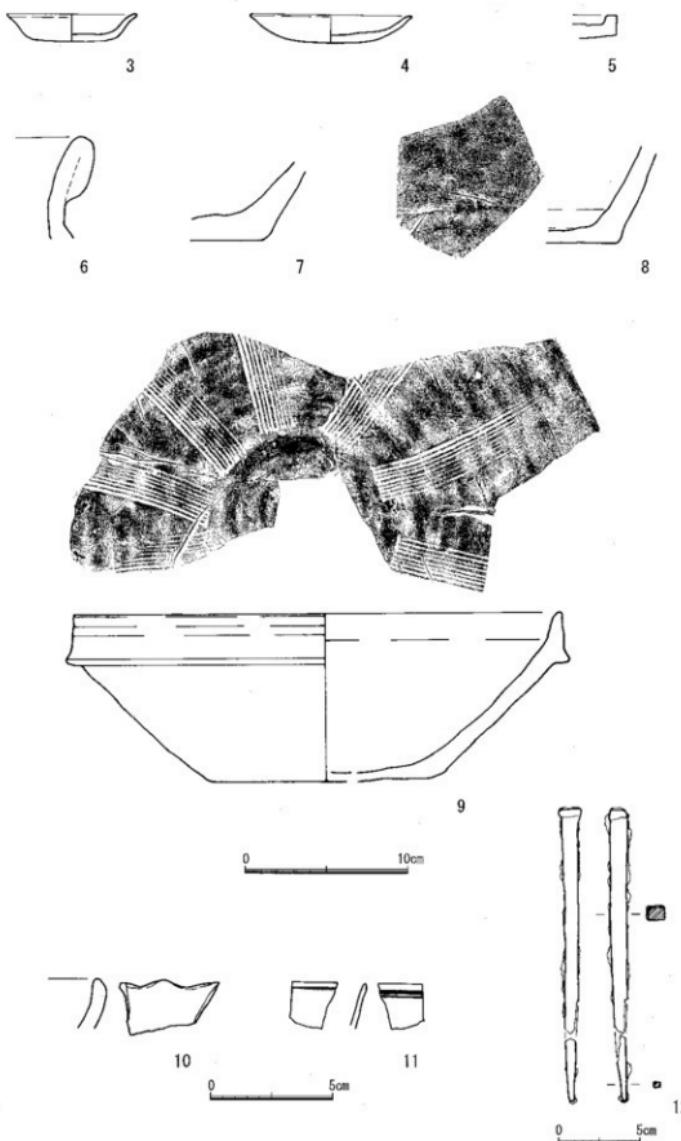
第10図 出土遺物1 (S=1/4)

の条線であるコビキA痕<sup>⑩</sup>が認められる。2は平瓦である。胎上、色調、焼成は1と類似する。丸瓦・平瓦はこの他数点出土しており、器面が軟質のものもあるが総じてつくりが丁寧で焼成も良好である。

土器は上部質七器であり、陶磁器は備前焼のほか青磁、染付磁器が各1点出土している。3・4は土師質土器皿である。3は口径8.0cm、4は口径10.0cmを測る小型の皿である。回転台を使用しており、底部にヘラキリ痕を残す。5は七鍋の口縁部である。備前焼は、今回の調査で最も多く出土した遺物である。資料の大半は壺もしくは甕の体部であり、図化した遺物は6～9のみである。6は甕の口縁部である。口縁部玉縁の断面形は、扁平な長楕円形を呈している。7・8は甕の底部である。いずれも内外面にナデが施されており、8の内面にはヨコナデが明瞭に確認できる。9は擂鉢である。口径30.9cmを測る。口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。内面には放射状にすり目が認められる。10は青磁であり、輪花鉢の口縁部とおもわれる。11は染付磁器であり、口縁端部の外側に2条、内面に1条の条線を巡らす。6・9は、形態から15世紀後半～16世紀初頭に属する。

鉄器は、鉄片を含め少量出土している。12は鉄釘である。途中で折損しており、推定で長さ18.3cm、最大幅1.4cmを測る。

【註】(1) 森田克行「IV 屋瓦」『摂津高槻城』高槻市教育委員会 1984年



第11図 出土遺物2 (S=1/2, 1/3)

## 第4章　まとめ

今回の調査では、掘立柱建物と上塙、土壘の遺構が検出され、備前焼を中心とした土器、瓦、少量の鉄器が出土した。限られた範囲の調査だが、その成果から推察される点について以下にまとめる。

まず、曲輪内の施設として掘立柱建物3棟を検出した。3棟は重複した位置にあり、立替関係にある建物2・3より後出すると考えられる建物1が16世紀代に属する。また、土壘1および包含層から少量の瓦が出土し、建物礎石に適するような河原石が土壘土留の石材に含まれることも勘案すれば、これまで想定されていなかった瓦葺きの建物が存在した蓋然性が高い。

次に曲輪および遺構の変遷について述べる。調査区内では、斜面の埋立てや岩帶の削出により現在の平坦面を造成すると同時に、土壘を築造している。ただし、建物2・3と土壘の方向が整合しないため、建物2・3を備えた平坦面を削平し現在の平坦面を新たに造成した可能性も考慮できる。また、建物1に近接する箇所の土壘は、築造後に土留を作り修築がおこなわれており、その際平坦面の一部も再整備された可能性がある。土壘と建物1の方向、土留を施した範囲から、土壘の修築と建物1の築造の間には一体性がうかがえ、これらの造作は時間的に近接するものと思われる。以上の状況から、調査区内では【建物2・3】→【土壘築造+平坦面の整備】→【建物1+土壘修築+平坦面の一部再整備】という曲輪および遺構の時間的変遷をひとまず想定しておきたい。

出土遺物のうち時期がある程度特定できるものは、備前焼の壺（第11図6）・擂鉢（第11図9）、瓦である。前者は15世紀後半～16世紀初頭に位置付けられ、後者はその特徴から16世紀後半に帰属するものと思われる。時期が明確な遺物は少なく、遺物と遺構との関係も希薄であるため、遺物から上述した曲輪の変遷を年代的に位置づけることは困難が伴う。しいて言うならば、赤松・山名両氏による争奪が繰り広げられた15世紀後半から三浦氏の支配下に置かれる16世紀初頭までに二ノ丸が曲輪として機能し、毛利・宇喜多両氏の攻防から宇喜多氏領有のもと江原氏が在城する16世紀後半に建物1の築造、土壘の修築などの城郭整備がおこなわれたことが調査成果から指摘できる。

遺物観察表

瓦類一覧

番号	出土遺構名	種類	法量(cm)			粘土・外面色調・施成	備考
			横長	残存幅	最大厚		
1	土壘1他	丸瓦	19.2	18.2	2.2	細砂一灰 (Hue7.5YR5/1) - 良好	内外面ナゲ調
2	包含層	軒瓦	10.8	12.4	1.8	粗砂 灰 (Hue7.5YR5/1) - 良好	内面ケズリ外面ナゲ調 内面右側・ヨコキア痕

土器・陶磁器一覧

番号	出土遺構名	種類	器種	法量(cm)			粘土・外面色調・施成	備考
				口径	器高	底径		
3	包含層	土師質土器	壺	8.0	1.6	5.0	粗砂 - 灰 (Hue7.5YR5/6) - 良好	底部ヘラキリ
4	包含層	土師質土器	壺	10.0	1.7	5.0	粗砂 - 黄灰 (Hue2.5YV4/1) - 良好	底部ヘラキリ
5	包含層	土師質土器	土鍋				粗砂 - ぶい様 (Hue7.5YR5/4) - 良好	内外面ナゲ調
6	包含層	備前焼	壺				粗砂 - ぶい様 (Hue7.5YR5/3) - 良好	内外面ナゲ調
7	土壘1	備前焼	壺				粗砂 - 灰 (Hue7.5YR5/1) - 良好	内外面ナゲ調
8	包含層	備前焼	壺				粗砂 - 灰 (Hue7.5YR5/1) - 良好	内外面ナゲ調
9	土壘1	備前焼	擂鉢	30.0	10.4	13.5	粗砂 - 青灰 (Hue2.5YR7/1) - 良好	内外面ナゲ調、損目9条
10	包含層	青 磁	鉢				陶石 - オリーブ灰 (Hue2.5YR6/1) - 良好	輪花鉢
11	表面採集	染付	皿?				陶石 - 白灰 (Hue8/8) - 良好	内面1条、外面2条の条痕

鉄器一覧

番号	出土遺構名	種類	法量(cm)			備考
			横長	残存幅	最大厚	
12	包含層	鉄釘	18.3	1.4	0.8	欠損品

# 附編 1 篠向城下における「町」の形成と推移をたどる —主に近世・近代の文献史料を手がかりに—

森 俊弘（真庭市教育委員会）

## はじめに

本稿は表題のとおり、篠向城下にみられる歴史的な特徴について、具体的には城下に見いだされる「町」の形成とその推移をたどることを目的とするものである。検討にあたっては、主に文献史料に依拠して進めるこになるが、その内実は篠向城に限らずかなり心許ない。

### 1 文献史料にみる篠向城下

中世における城下の様相を伝える史料がほとんど皆無のなかで、津山藩森家が編纂した地誌「作陽誌」は、元禄初年の作西地域各村の状況を把握することができる有益な史料である。

まず篠向城についてみると、山路は5町30間、東は瑞景寺山に続き、北は三崎村と目木村、西北は台金屋村、西は大庭村と平松村、南は古見村、眺望はよい。創城は不詳で、高松合戦の後に城主となつた江原親次の病死により断絶した。親次とその一門、家臣の居宅が「城西辺」にあり、耕作地となっている、とある。大庭村は「大篠第」という往向山から突き出た尾根を境に隣村の三崎村と隔たつている。また山内に真言宗寺院、篠向山普門寺があり、本寺は江原氏の菩提寺金龍山江源寺（久米郡美咲町里）。開基は未詳、篠向城主の祈願所であったが、城が廃れた後に寺も衰退したとある。

「城西辺」にあたる大庭村についてみると、同村は津山（津山市山下）から5里20町、長さ3町余りある集落は古くは雲作往来の宿駅で、村高は635石4斗（田546石8斗、畑88石6斗）、戸数は67戸、人口は334人とある。また、大庭村に接して大庭川（目木川）が流れ、久世川（旭川）へ合流しているとある。ちなみに大庭村の宿駅機能は寛永期（1624～43）頃に久世村へと移ったと考えられている（『久世町史』）。そして「作陽誌」に先行して執筆された「武家聞伝記」（岡山大学附属図書館池田家文庫）の記事からは、延宝期（1673～81）以前の村内に「町」と呼ばれる大規模な集落があつたことが知られる（表1）。

村内にある八幡宮は大庭・平松・三崎・台金屋・多田五ヶ村の氏神で、祭日は9月23日。境内は東西40間、南北50間、石鳥居は関長政の家臣作野氏が造立したものとある。

福祐山法光寺は法華宗寺院で、本寺は具足山妙覺寺（京都府）。天正2年（1572）に江原兵庫の室が建立し、当時の住僧は教覚院とある。境内は東西15間、南北14間。ただし、現存する寺記に、明応3年（1494）

に教林院日從の創建とし、そのち「江原兵庫親次老母」が惠照院日春（1586～1608在職）の代に寺内の「鬼子母神・十女神」を建立したとあり、年代感をやや異にする。また、江原氏家臣でのち三崎村に居住した金田氏が有力檀徒とされていることは興味深い（「当寺曆代弁由緒」ほか）。

有経山妙蓮寺も法華宗寺院で、本寺は記載がない。慶長元年（1596）、本住房日永の創建とある。境内は東西15間、南北19間。梵鐘は「旦野氏」寄進のものとある。「旦野氏」は、近世初頭に「且（旦）助右衛門」とこと治作という老人の大庭村居住が知られるように、継続して同地の有力住民として存続

表1 大庭村の集落と軒数

集落名	軒数
町	74間（軒）
大日	12間（軒）
鰐	7間（軒）
合計	93間（軒）

していたことが窺われる（「中島本政覚書」など）。このほか、「大日寺跡」として、慶長年中に滅んだ真言宗寺院があったことが記されている。

## 2 切絵図にみる篠向城下

それではより具体的な大庭村の地勢について、明治中期の切絵図などを手がかりに図示したのが（図1）である。篠向山西麓の谷裾に「内構」の地名が、その前方を通過する街道沿いには「町頭」「屋敷」「〇〇屋敷」の小字を残す短冊型地割が残り、その中程で「高田道」が分岐して西方へと向かっている。また「内構」に対する外構的な町屋のありかたや「小門口」の地名から、小規模ながら武家屋敷や寺院、町屋からなる「惣構」があった可能性もある。この大庭と呼ばれる集落一帯がかつての「町」にあたるとみられ、現在も農家が旧街道に沿って並び、かつての街村的な雰囲気を伝えている。

大庭村の北部と南部には条里地割がみられるが、大庭集落一帯では確認できない。実際、集落北部を流れる日木川（大庭川）は、延宝元年（1673）や明治25年（1892）の大水害により流路が移動し、現在に至ったとされるように、古く一帯は氾濫原の様相を呈していたと見られる（『美作略史』、『久世町史』など）。その中程にはまさに「河原市場」や「教林防（坊）」「紫雲寺」の地名が残る。

切絵図のみの検証で不安は残るが、ここに他の戦国期城下町で指摘されているような、「惣構の中に武士と直属商工業者が居住し、その外に（中略）市場が存在する」「二元的な構造」が見いだされるのは特に注目されるところである（小島道裕『戦国・織豊期の都市と地域』2005）。

## 3 篠向城下の「町」の成立と推移

こうした篠向城下の「町」はいつ、どのように成立し、推移したのだろうか。

篠向城そのものの歴史的推移についてはかつて述べたことがあるが、南北朝期から天正期（1573～92）のなかばまではほぼ戦時の籠城・普請・在番の記事に限られ、天正10年（1582）からまもなく国人江原氏が同城を居城に定めたとされる以降の時期が、政情の安定も含め、初めて特定の国人勢力による地域の求心点となりえた可能性を窺わせている（『篠向城跡』2007）。

さて元来、いわゆる出雲往来は日木村から久世村へ直線的に通じ、森忠政の街道整備によって大庭村を経由するようになったとの伝承をもとにした見解がある（『久世町史』など）。確かに郡衙想定地や古代寺院跡の立地などから鑑みて、後述するように津山藩森家の変更とされる点以外は一応肯定できる。そのうえで少なくとも近世以降の出雲往来が坂山や氾濫原をわざわざ通過し大庭を経由することになっているのは、変遷がおそらくその間の政治的な理由によるからではと思い至る。

美作国における近世宿駅制度は、既に宇喜多秀家の時代に存在が窺われ（「作陽誌」久米郡南分県邑部稻岡庄南庄村条）、当然それは秀家が天正末年から慶長初年に行なったとされる岡山城の修築、城下町の整備と山陽道の誘致に連動したものであったろう。大庭の地は岡山から伯耆国への通路上にあり、あわせて宇喜多氏一門とされる江原氏の拠点である。つまり大庭の宿駅機能は領国の要衝として宇喜多氏が設定したもので、近世の出雲往来が大庭の町並のなかばから西方へ分岐するといった道筋の不自然さも、そうした事情に起因すると考えれば、より合理的で分かりやすい。

以上から、篠向城下の整備は、江原氏が同城に拠ったとされる天正期なかばを画期に、所領における政治・経済の中心地化を志向して、家臣や直属商工業者の集住、寺院の建立などをもって進められ、程なく宇喜多氏から宿駅に設定されたとの見通しを立ててみたい。ただし、ほぼ同時期に豊臣政権の「山城停止令」が領国内で実施されたらしいことから、史料的には慶長3年（1598）の親次の病死により

廃城（「作陽誌」）とあるものの、実質いつまで山上の城郭が存続したか定かではない。親次の遺児とされる「浮田内記」はまもなく秀家の近習として三千石を知行しているように、篠向廃城の後は宇喜多氏の政策に基づき岡山城下へ本拠を置いたものと思われる（『宇喜多家分限帳』など）。

なお、同5年の宇喜多氏の没落のちまもなく、内記とその母である宇喜多秀家の姉の「作州笛吹」滞在が知られているが、これは金田氏や旦氏など帰農したゆかりの人々の支援で旧城下にあったということだろう（『吉備温故秘録』など）。その後も「町」は宿駅としてしばらく存続するものの、森忠政の美作国入部を経たのち宿駅機能を失い、次第に農村集落へと変容していったと考えられる。

#### おわりに

わずかな史料からではあるが、篠向城下の「町」の形成とその推移について考えてみた。

江原氏が宇喜多氏の一門という点からやや特別に属するかも知れないが、例えば東美作の倉敷城（美作市林野）でも天正末から文禄期にかけて、在番を命じられた宇喜多家の重臣によって城下町整備が促された形跡を認めることができる（『美作町史』通史編）。篠向城のそれも、宇喜多氏政権の領国政策の一端や、政策に対する国人層の動向などを窺う一例として興味深いものがある。

現地踏査など課題は多いが、本稿が少しでも今後の参考となれば幸いである。

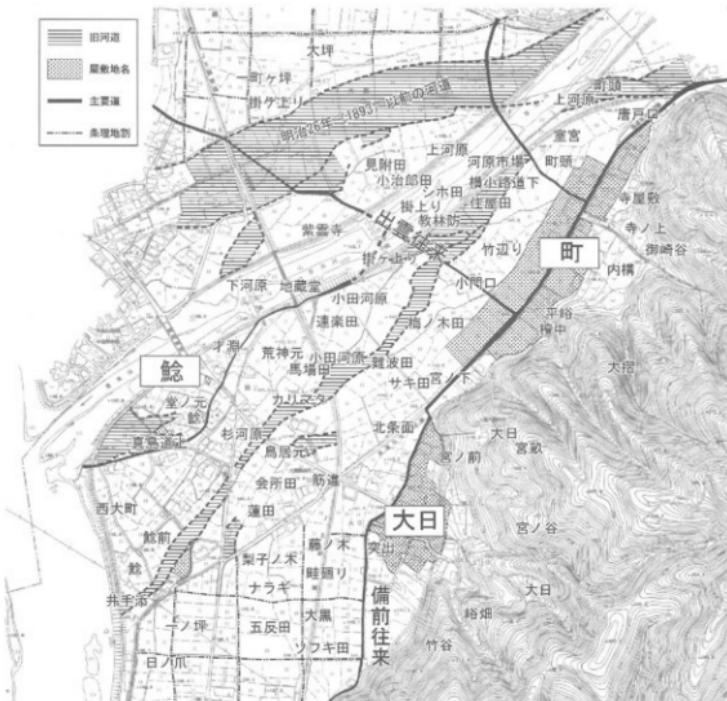


図1 真庭市大庭の小字と街道・旧河道（市資料と現地踏査により作製）

## 附編 2 篠向城跡出土瓦の胎土分析

白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）

### 1. 分析目的

篠向城跡出土瓦の研究では、乗岡 実氏の研究があり、本丸跡からは天正5年（1577）銘が刻印された軒平瓦が採集されている。そしてこの軒平瓦が播磨阿賀の工人の製品であることがわかつている<sup>(1)</sup>。今回の胎土分析では二ノ丸跡の調査で丸・平瓦が出土しており、この瓦を自然化学的な胎土分析により胎土の特徴を調べ、瓦生産地推定に向けての基礎データとする目的としている。また、現在までに蓄積している勝山高田城本丸や岡山城出土瓦とも比較した。

### 2. 分析方法と試料

分析方法は、蛍光X線分析と実体顕微鏡による胎土観察の2つの分析方法で胎土を検討した。

蛍光X線分析法では、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、Pの10成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーエクスカルシウム社製 SEA2010L）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成型機で約15 MPaの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。

実体顕微鏡による胎土観察では、土器の胎土中に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。なお、砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、非常に多い・多い・少ない・まれに、の4段階であらわした。

分析試料は、第1表に示した27点である。内訳は丸瓦6点、平瓦20点、軒平瓦1点である。

### 3. 分析結果

#### （1）蛍光X線分析結果について

この分析では測定した10成分のうち、分析試料に顕著な差がみられたのは、Si、Ti、Al、Ca、Kの5成分であった。この5成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

第1図 K-Ca、第2図 Ti-Ca、第3図 Si-Alの各散布図では、篠向城出土の瓦はすべて1つにまとまつた。また第1・2図で高田城出土瓦のうち試料番号2・3の平瓦のCa量が多く、他の高田城出土瓦の胎土と異なっていたが第3図では高田城の瓦は1つにまとまり、篠向と高田の瓦は明らかに胎土が異なっていた。

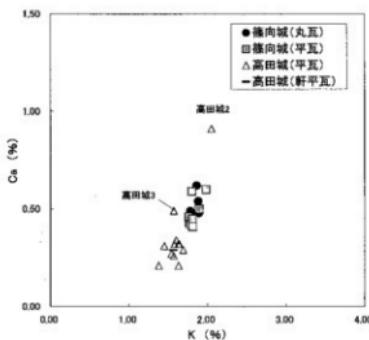
次に第4図 K-Ca、第5図 Ti-Ca、第6図 Si-Alの各散布図では、岡山城出土瓦と比較した。その結果、第4図では、岡山城出土の瓦のうち、Ca量が少ない瓦と篠向城の瓦と胎土が一致した。しかし、第5図では、岡山城出土瓦とは胎土が異なっていた。第6図でも一部重なる部分がみられるもののほぼ胎土が異なっていると推測された。また高田城と岡山城の瓦も胎土が異なっていた。

#### （2）実体顕微鏡観察結果について

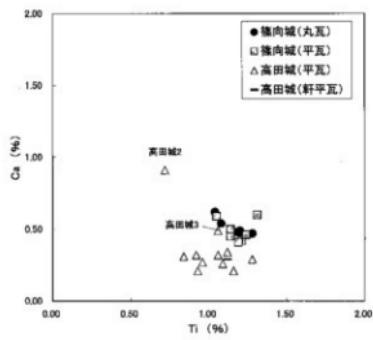
篠向城および高田城出土瓦の表面の胎土観察を実施したところ以下のようないくつかの結果となった。

##### ・篠向城跡出土の丸瓦・平瓦（第7図、写真1・2）。

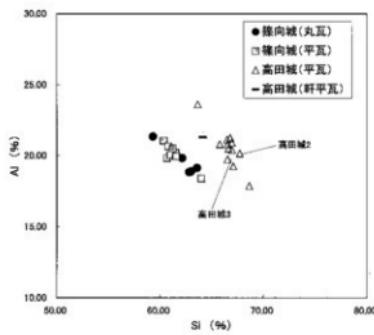
焼成は須恵質および瓦質で、ほとんどの鉱物が消失している。



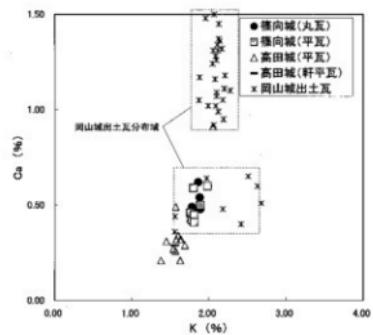
第1図 高田城出土瓦との胎土比較(K-Ca)



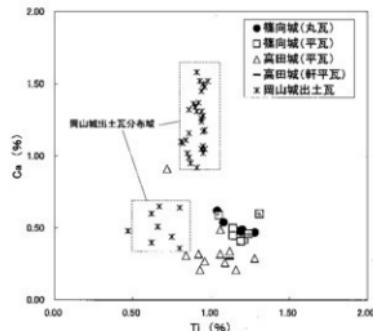
第2図 高田城出土瓦との胎土比較(Ti-Ca)



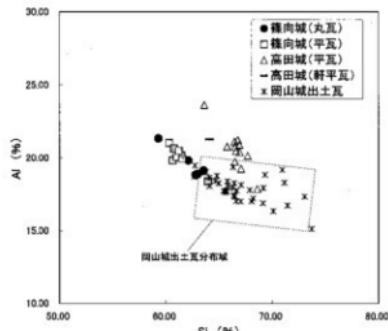
第3図 高田城出土瓦との胎土比較(Si-Al)



第4図 岡山城出土瓦との胎土比較(K-Ca)



第5図 岡山城出土瓦との胎土比較(Ti-Ca)



第6図 岡山城出土瓦との胎土比較(Si-Al)

3mm 以下の石英を含み、1mm 以下の長石・黒雲母を少量と、まれに片岩の岩石片を含む。

#### ・勝山高田城跡出土平瓦（第7図、写真3）

焼成は瓦質および瓦質よりやや軟質で、ある程度鉱物の観察が可能である。

3mm 以下の石英を多量に含み、1mm 以下の長石・黒雲母を少量含む。まれに片岩の岩石片らしきものを含む。

以上の観察結果をまとめると、焼成観察では篠向城出土の瓦には、須恵質・瓦質の瓦が多く、高田城出土の瓦には瓦質（やや軟質）のものが多くみられ、今回分析した試料では篠向城出土の瓦のほうが焼成は良好である。また胎土の砂粒観察では、基本的な砂粒構成は同じであったが、篠向城の瓦には長石が若干多く含まれる傾向にあった。

#### 4.まとめ

蛍光X線分析と実体顕微鏡観察による篠向城出土瓦の胎土分析では、以下のことが推定された。

(1) 蛍光X線分析では、篠向城と高田城の瓦のあいだでは、胎土が異なり判別が可能であった。つまり篠向、高田の瓦は胎土がそれぞれにまとまり、今回分析した岡遺跡出土の瓦は胎土が異なることが推定される。また岡山城出土の瓦と比較したところ岡山城の瓦とも胎土が異なっていることが推測された。

(2) 実体顕微鏡による砂粒観察では砂粒構成が篠向、高田とも基本的に同じであったが、長石の含有量が篠向城に多い傾向にあった。この違いが胎土差にあらわれたと推定される。

今回の胎土分析では篠向城および高田城出土の限られた瓦試料からの検討であったこともあり、十分な成果が得られなかった。今後、県内外周辺地域の試料データを蓄積し、近世瓦の生産地推定を検討する必要がある。

この分析では以下の方々、機関にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

池上 博、新谷俊典、乗岡 実、岡山市教育委員会、真庭市教育委員会（敬称略）

#### 註

(1) 乗岡 実 2000 「中世山城の瓦三題」『吉備 されど吉備』古代吉備を語る会

第1表 篠向城跡ほか出土瓦の胎土分析試料一覧

単位:SiO<sub>2</sub>-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>(%)

分析 No.	遺跡名	分類	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>
1	篠向城	丸瓦	62.81	1.04	18.84	9.54	0.20	1.73	0.62	2.87	1.86	0.22
2	篠向城	丸瓦	63.01	1.08	18.89	10.01	0.23	1.60	0.54	2.25	1.89	0.11
3	篠向城	丸瓦	63.56	1.18	19.13	10.21	0.25	1.58	0.48	1.15	1.89	0.15
4	篠向城	丸瓦	59.32	1.28	21.34	10.71	0.27	1.96	0.47	2.48	1.81	0.12
5	篠向城	丸瓦	62.13	1.20	18.88	9.95	0.29	1.82	0.49	1.90	1.79	0.19
6	篠向城	丸瓦	60.34	1.24	21.24	10.52	0.27	1.76	0.50	2.15	1.77	0.17
7	篠向城	平瓦	63.99	1.08	18.39	9.98	0.23	1.14	0.59	2.15	1.81	0.18
8	篠向城	平瓦	61.48	1.21	20.19	10.33	0.26	1.57	0.42	2.15	1.78	0.21
9	篠向城	平瓦	60.67	1.19	19.82	9.97	0.30	1.97	0.41	2.51	1.81	0.15
10	篠向城	平瓦	61.00	1.24	20.03	10.55	0.27	1.64	0.46	2.66	1.76	0.19
11	篠向城	平瓦	60.79	1.31	20.65	10.77	0.23	1.82	0.60	1.46	1.96	0.16
12	篠向城	平瓦	61.56	1.14	19.94	10.37	0.22	1.68	0.45	2.47	1.81	0.17
13	篠向城	平瓦	61.23	1.14	20.50	10.45	0.27	1.72	0.50	1.88	1.89	0.19
14	高田城	平瓦	66.54	0.93	20.77	4.68	0.06	2.73	0.21	2.40	1.38	0.11
1	高田城	平瓦	67.72	0.72	20.14	3.93	0.06	1.37	0.91	2.40	2.05	0.39
2	高田城	平瓦	65.82	0.73	19.73	5.80	0.10	1.74	0.49	2.45	1.57	0.38
3	高田城	平瓦	66.97	0.92	20.78	5.00	0.06	1.71	0.84	2.44	1.54	0.33
4	高田城	丸瓦(A1)	66.63	0.96	20.89	5.20	0.06	1.70	0.22	2.29	1.58	0.01
5	高田城	丸瓦(A2)	68.97	0.92	20.58	5.60	0.06	1.70	0.22	2.29	1.45	0.01
6	高田城	平瓦(A3)	66.94	0.84	20.91	4.51	0.06	2.58	0.31	2.22	1.45	0.01
7	高田城	平瓦(B1)	66.79	1.06	21.23	4.99	0.07	1.44	0.32	2.25	1.63	0.05
8	高田城	平瓦(B2)	67.10	0.92	19.24	5.29	0.10	1.74	0.32	3.40	1.64	0.05
9	高田城	平瓦(B3)	65.78	1.09	20.79	5.70	0.10	1.77	0.26	2.69	1.57	0.09
10	高田城	平瓦(B4)	63.65	1.28	23.63	5.56	0.07	1.40	0.29	2.22	1.69	0.05
11	高田城	平瓦(B5)	66.63	1.16	20.48	5.42	0.06	1.37	0.21	2.74	1.63	0.06
12	高田城	平瓦(B6)	66.49	1.12	21.12	5.17	0.08	1.58	0.34	2.19	1.68	0.10
13	高田城	平瓦	64.13	1.12	21.28	6.87	0.11	1.69	0.29	2.62	1.56	0.19

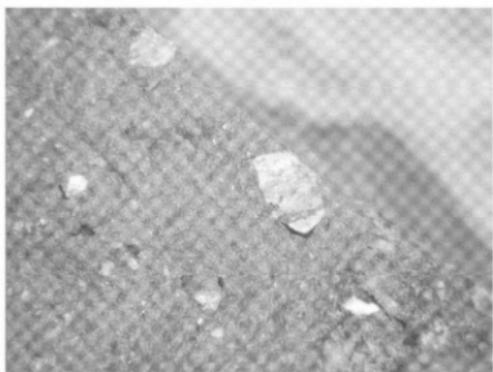


写真 1. 篠向城 No. 1  
丸瓦 (須恵質)

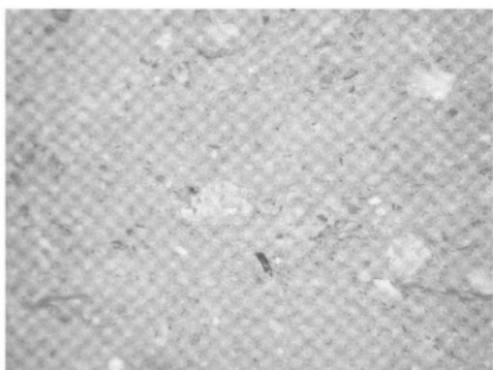


写真 2. 篠向城 No. 11  
平瓦 (瓦質)



写真 3. 高田城 No. 5  
平瓦 (瓦質)

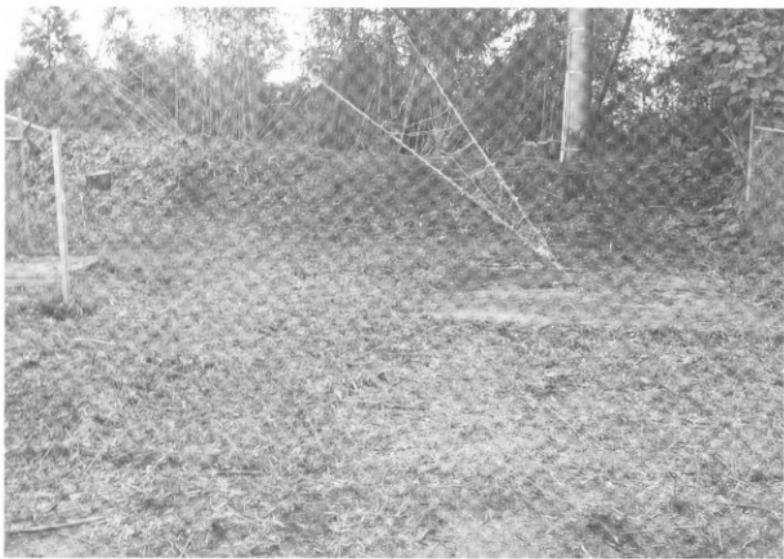
0 2mm

第 7 図 実体顕微鏡写真

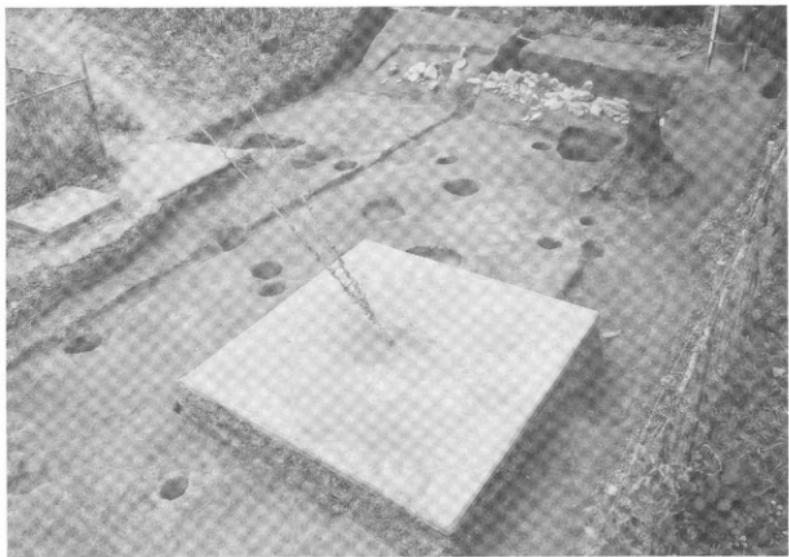
図版 1



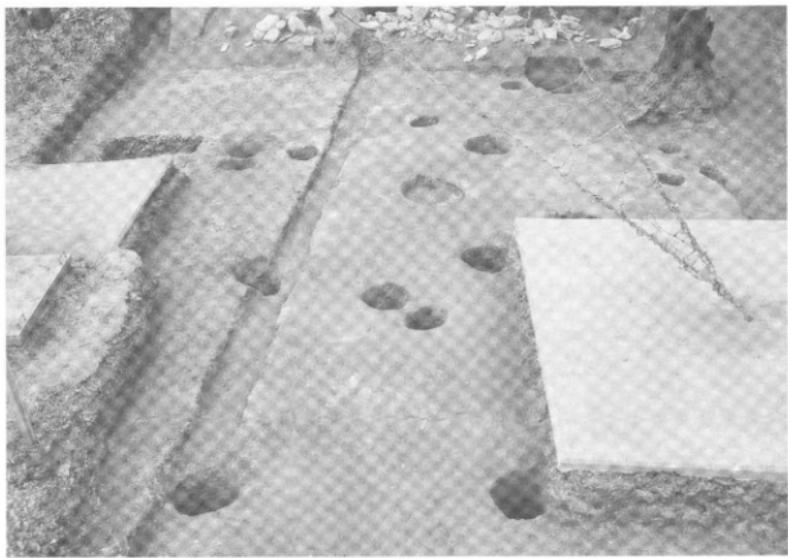
1 篠向城遠景（南西から）



2 調査前全景（南西から）



1 調査区全景（南から）



2 調査区全景（南西から）

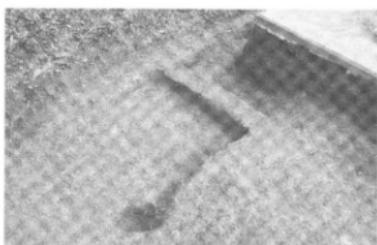
図版 3



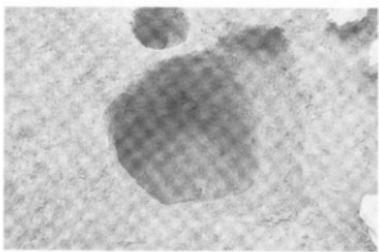
1 調査区土層断面（南から）



2 堀立柱建物 1（北東から）



3 土壌 1（北から）



4 土壌 2（東から）



5 二丸北西部側土壠（東から）



1 土壠（南西から）



2 土壠1断面（南東から）



3 土壠内土留（南西から）

図版 5



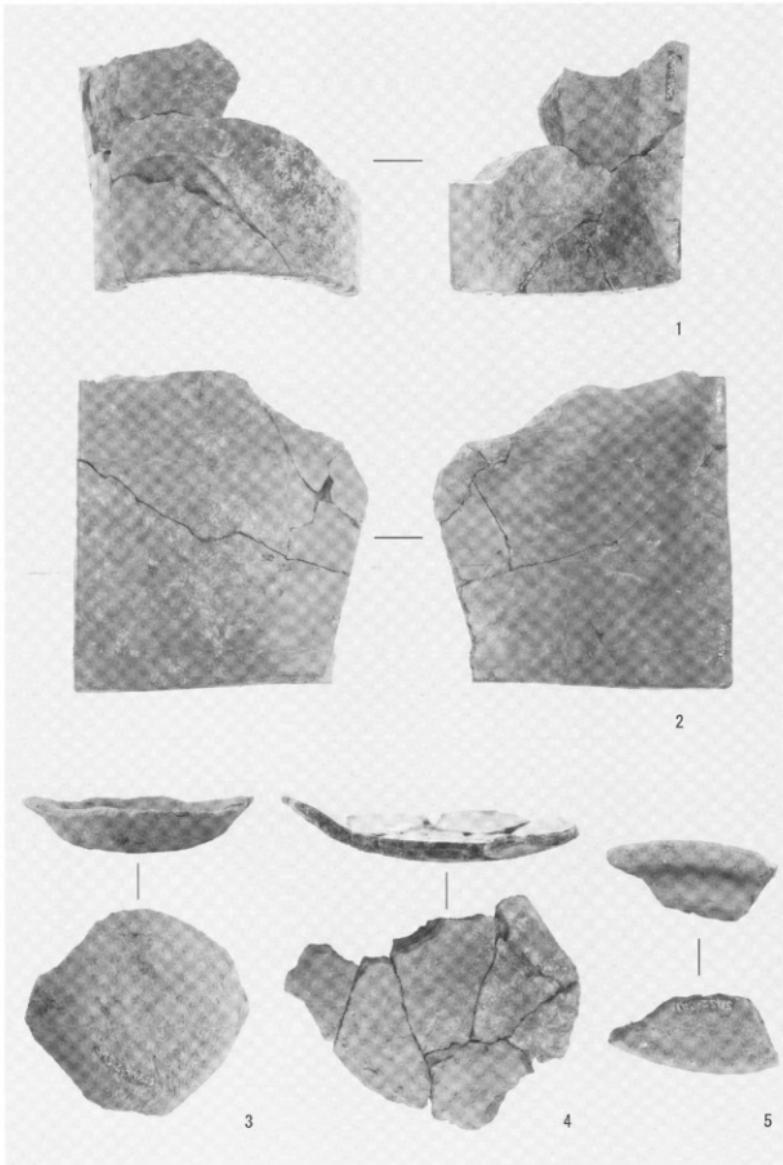
1 土墨内土留（東から）



2 土留内瓦出土状況  
(南西から)

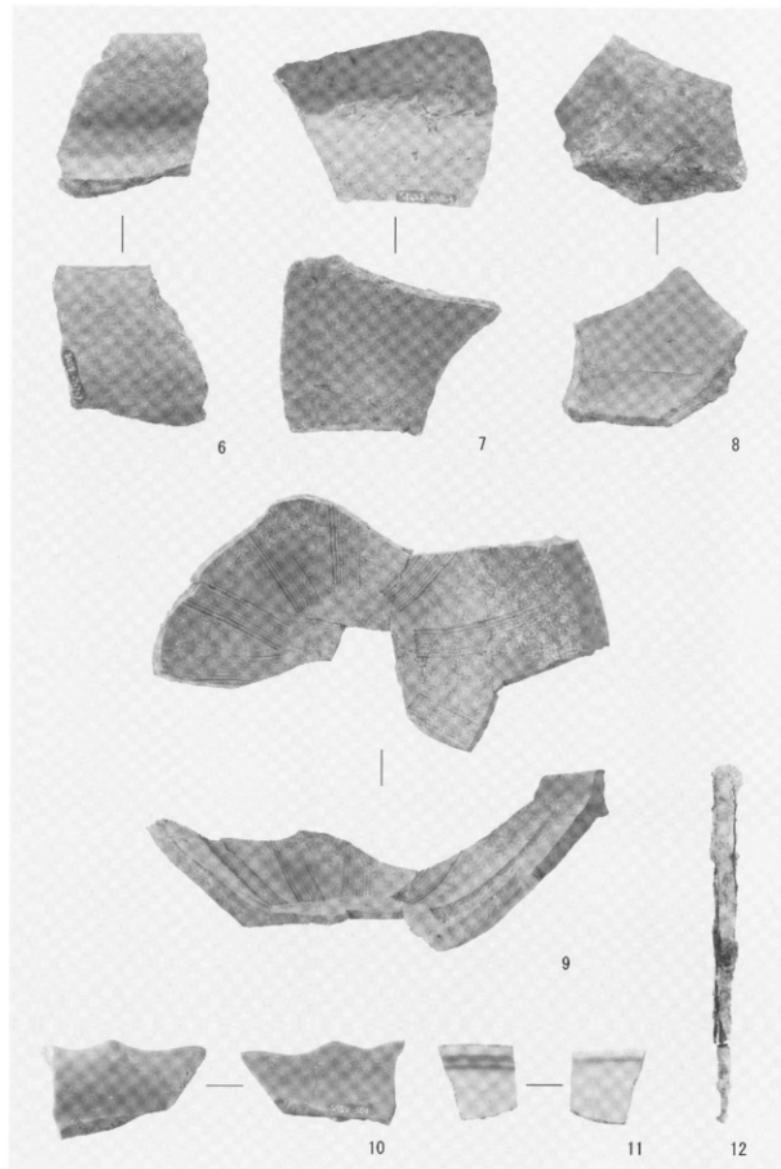


3 調査風景



1 出土瓦・土器

図版 7



1 出土陶磁器・鉄器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ささぶきじょう							
書名	篠向城							
副書名	久世デジタル放送中継局建設事業に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	新谷俊典・白石 純・森 俊弘							
編集機関	久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会							
所在地	真庭市落合垂水 1901-5							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
ささ ぶき じょう 篠 向 城	岡山県 真庭市 三崎 235-3	332143		35 度 03 分 41 秒	133 度 46 分 37 秒	20070613 ~ 20070730	100 m <sup>2</sup>	デジタル放送 中継局建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
篠向城	城跡	中世	掘立柱建物3 土壙5 土塁1	瓦 土師質土器 陶磁器（青磁 ・染付・備前焼） 鉄釘	二ノ丸の一部を調査			

## 篠向城

久世デジタル放送中継局  
建設事業に伴う発掘調査

平成 20 年 3 月 27 日 印刷  
平成 20 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会

〒 719-3191

真庭市落合垂水 1901-5 (真庭市教育委員会教育総務課内)

Tel : 0867(52)1180 FAX : 0867(52)1460

印 刷 真庭印刷工業株式会社